

T. Hardy の *The Woodlanders* について

小 山 浩 代

(1)

ここでとりあげるのは、*The Novels of Character and Environment* と作者自ら名付けた作品群の第五作目にあたるが、ハーディ研究の諸家の中には、この作品を“serious”に考察することは極めて難しいことであると評する人もおり¹⁾、さらに確信をもって、“*The Woodlanders* will probably remain the least read and appreciated of Hardy’s major novels—and rightly so.”²⁾と結論を下している場合もある。それぞれの分析・解釈による評価であろうが、本作品が1885年、つまり性格悲劇「キャスタブリッジ市長」(1886)とその後の大作「ダーバヴィル家のテス」(1891)の間に執筆されており、作家ハーディの思想的背景その他から過渡期の創作であることを考え、小説として種々の欠点を持ちながら、ハーディを論ずる際に、見落してはならない意味を持つ作品である。ハーディの読者であれば、開巻間もなくして、*The Woodlanders* が彼の他の代表作と異なって、story, character, plot を多分に読者の好奇心を充たすよう展開することを意図して書かれたものではないことを明瞭に読みとれるはずである。今は人々の記憶から忘れられ遠く隔った Wessex の、うっそうとした Woodland——快活さとは様相を異にする沈黙感、ゆううつな気分に似つかわしい樹林地帯——で、此処にも人々がと思われるように、静かに営まれている日常生活が、精妙に描き出されている。平凡で単調な素材・手法は、内容・形式ともに変化に富み複雑な構成を持つことの多い現代作品に慣れ親しんだ読

者には、あまりに冗長な退屈感を与えることも容易に想像される。しかし、作品をながれる、自然界と人の余韻深い交わりは、作者が自然と人間にいたっている理解と共鳴感のありのままの発露であり、イギリス散文文学の伝統である大人の文学としての芸術性を十分に伝える作品であると考えられる。

本誌紀要の第8号、第9号において「帰郷」(*The Return of the Native*)と「キャスタブリッジ市長」を作品研究の立場から批評し載せてあるが、*The Woodlanders* は、作品論としてだけではなく、作家論への approach をすすめざるを得ない特質を持っており、それをたどること、言い換えれば、「ハーディらしさ」(*Hardyesque qualities*)とも云うことのできる大変情緒的な解釈を試みるのが、この小論のテーマとなる。

(2)

ハーディの作品の芸術的特性には、作品の雰囲気という分析しにくい一面があり、その成功は自然描写のたくみさによる場合が殆どである。Hardy's subject is never man alone or nature alone, but always man in nature.....He never doubts that it is the presence of man which gives interest and meaning to nature.³⁾ という見方は、ハーディのいわゆる Wessex Novels 全体について云えることであるが、この *The Woodlanders* に関してもしげんに納得できる内容である。

Bristol から England 南海岸にむかって、かつては繁く馬車の通った highway を辿って行くと、その道のりの後半にさしかかったところに、りんご園の散在する広大な森林地帯が現われる。此処が Egdon Heath とともに、Wessex Novels が展開する重要な背景の一つ、Blackmoor Vale である。ハーディの心は、太古のウェセックスの spirit にとりつかれたかのように、その再現に想像をはしらせるのである。その想像はつねに「過ぎ去った時」にむかって働き、narrator としてのハーディは容易に読者を幻想の世界へ誘い出すのである。

At one place, on the skirts of Blackmoor Vale, where the bold brow of High-Stoy Hill is seen two or three miles ahead, the leaves lie so thick in autumn as to completely bury the track. The spot is lonely, and when the days are darkening the many gay charioteers now perished who have rolled along the way, the blistered soles that have trodden it, and the tears that have wetted it, return upon the mind of the loiterer.⁴⁾ (p. 1)

この High-Stoy Hill へ行く途中に森が切りとられたような形で小説の舞台 Little Hintock の村が在る。筋といえるような筋、事件は殆どない。自然を相手の生業に従って、つつましく暮らすわずかな人々の平凡な生活が語られるだけで、「帰郷」にあらわれた自然と人間の対立した激しい緊張をとまなり雰囲気のもつ物語的性格は乏しい。作者はそれだけ時間的空間的に距離を保って冥想的筆のすすめ方に終始する。人物が登場する前に、この自然描写は、作品全体を支配する運命的、高度に詩的な雰囲気を伝える力を持って、自然が君臨する世界をかもし出す。そのあたりは静寂で曇り日には、その道を陽気に踏み歩いた今はなき charioteer たち、またその道をぬらした旅人達の涙が、さすらう人の心に、そしてハーディの心によみがえってくる。

It was one of those sequestered spots outside the gates of the world where may usually be found more meditation than action, and more listlessness than meditation; where reasoning proceeds on narrow premisses, and results in inferences wildly imaginative; yet where, from time to time, dreams of a grandeur and unity truly Sophoclean are enacted in the real, by virtue of the concentrated passions and closely-knit interdependence of the lives therein. (pp. 4-5)

この人里はなれた、世間の垣根の外側の孤立した生活の中でこそ concentrated passions と closely-knit interdependence によって織り成される人間のさまざまな在りようが、一層はっきりと演じられることになる。

小説の構成上、ハーディは巻頭で不変の姿をほこる自然界を、不思議な

力で登場させて、各作品の性格を決定する手法を用いる。その自然は人間より以上に神秘的な力をもって、作者の意図を達成するのに役立つ。

The Woodlanders の魅力でありハーディが描こうとした第一の主題は Woodland そのもの、そこに住む人々をすっかりつつみこむ森林地帯の精神、形而上学的姿である。静かな抒情詩的な物語であるが、作中 Unfulfilled Intention と擬人化されてあらわれる意志の力が自然と人間に働きかけて、四季おりおりに変わる樹々の営みと美しさを映すのみならず、この森全体の動きを、一個の巨大な生きもののように現わす。Here, as everywhere, the Unfulfilled Intention, which makes life what it is, was as obvious as it could be among the depraved crowds of a city slum. The leaf was deformed, the curves was crippled, the taper was interrupted; the lichen ate the vigour of the stalk, and the ivy slowly strangled to death the promising sapling. (p. 59) ここにも他所においてと同様、果されない意志が、都会の貧民街の退廃した人々の群にみられるように、明瞭にあらわれていた……地衣は茎の精気を食べつくし、蔦はこれからみごとに育つはずの若木をゆっくりしめ殺してしまった。この意志に働きかけられて森の樹樹は、あたかも人間界と同じように苦しみあえいでいる。ハーディの小説の中でもっとも強く Darwinism の影響⁵⁾を感じさせる作品と言われるのもこのような描写からであり、自然界にみられる淘汰の struggle を人間とその周囲の環境との関係にみだてていることがわかり、次の個所も一例である。

From the other window all she could see were more trees, in jackets of lichen and stockings of moss. At their roots were stemless yellow fungi like lemons and apricots, and tall fungi with more stem than stool. Next were more trees close together, wrestling for existence, their branches disfigured with wounds resulting from their mutual rubbings and blows. It was the struggle between these neighbours that she had heard in the night. Beneath them were the rotting stumps of those of the group that

had been vanquished long ago, rising from their mossy setting like black teeth from green gums. Further on were other tufts of moss in islands divided by the shed leaves—variety upon variety, dark green and pale green; moss like little fir-trees, like plush, like malachite; like nothing on earth except moss. (p. 376)

自然界の現象をこのように醜い争いの場として眺め、客観的に描ききる態度は、冷酷で陰うつな印象を与えるけれども、ひるがえってみれば、むしろしばまれ、踏みつけられて痛みを覚えるものへの深い関心が秘められていることに気が付き、そこにハーディの真意を見出すことも忘れてはならない。人物の性格と運命に対しても同じような人間愛を作者はしばしばあらわすのである。苦しむ自然と对象的に、森の美しさを見せる場面もある。彼の時代にすでに詩の世界になりつつあった田園風景、村人達の風俗習慣をしみじみとしたあたたかい共鳴感を持って写している。

The horses wore their bells that day. There were sixteen to the team, carried on a frame above each animal's shoulders, and turned to scale, so as to form two octaves, running from the highest note on the right or off-side of the leader to the lowest on the left or near-side of the shaft-horse. Melbury was among the last to retain horse-bells in that neighbourhood; for living at Little Hintock, where the lanes yet remained as narrow as before the days of turn-pike roads, these sound-signals were still as useful to him and his neighbours as they had ever been in former times. Much backing was saved in the course of a year by the warning notes they cast ahead; moreover, the tones of all the teams in the district being known to the carters of each, they could tell a long way off on a dark night whether they were about to encounter friends or strangers. (p. 113)

木材を積んだ大きな馬車は、十六個の鈴をひびかせて霧の深い樹林地帯の道をすすむ。暗闇の中でも遠くからきこえる鈴のひびき方、音色の微妙

なちがいから、お互いに相手が誰であるか、あるいは見知らぬ人かどうか聞き分けることができる。それはある時は道をゆずり合う術にもなり、生活に密着した風情でもある。郷愁と呼ぶには深すぎる愛惜の念にたえ切れぬかのように、ハーディの筆は Wessex 古来の姿を写し、各作品の趣きに彩りをそえるのである。この筆致は何れの作品にも個性と真実感をただよわせ、作者が如何に感受性を鋭敏に働かせて、且つ優しい心を具えて、静かに生命あるすべてのものを慈しみつづけたかを伝えるものである。

(3)

次に登場人物の世界を窺てゆくと、ハーディが最も好む、田園的風情を発揮するのは、Giles Winterborne であり、純粹さ、まじめさの点で Woodland の spirit であり、文明の詭弁と対照をなす存在である。この小説の mythic motif⁶⁾ をあらわすと考えられる。

He rose upon her memory as the fruit-god and the wood-god in aliteration: sometimes leafy and smeared with green lichen, as she had seen him amongst the sappy boughs of the plantations: sometimes cider-stained and starred with apple-pips, as she had met him on his return from cider-making in Blackmoor Vale, with his vats and presses beside him. In her secret heart she approximated to her father's enthusiasm in wishing to show Files once for all how she still regarded him. (p. 335)

Marty South は Giles を慕い、Giles には Grace Melbury という婚約者があり、Grace は Dr. Fitzpiers に惹かれ、Fitzpiers は Mrs. Charmond に思いを寄せ、Giles の死を climax に、何れの人物も幸福を否定される人生の皮肉を経験しなければならない。一見 Grace と Fitzpiers を中心に物語がすすめられるように思われるが、他の作品と比較する時、構造上の散漫さを認めないわけにはゆかない。他方この散文的単調さが、*The Woodlanders* の特徴となっていることも事実である。

そのような雰囲気をつくり出しているのは(2)であつかった自然をみる時

のハーディの精密な鑑識眼と同時に、森の乙女 Marty South と Giles に具現されている彼岸の魂の、美しい清らかな世界である。森の樹々とともに生活を享受し、かなしみをおぼえる二人に、自然は「帰郷」の Eustatia の場合を想い起させる冷酷な仕打ちを与えるけれども、それにもかかわらず、読者に清められた深い感銘を残す源泉は、文字通り Woodland に住む人々である、Marty と Giles にそなわる天性の人間信頼である。‘Marty, always doomed to sacrifice desire to obligation’ (p. 174) と語られているように、寡黙な Marty の人生は、耐えしのぼるべきものであることに疑いをいただくことさえなく、自ら求めたのしむことのできるものではなかった。詩的に繊細にハーディの筆は、洗練された悲劇的な姿に彼女をつくりあげている。やがて Wessex の大自然を舞台にヒロインとなって活躍する Tess につらなる人物としてみることもできるかもしれないが、「キャスタブリッジ市長」の Henchard や「帰郷」の Eustatia のように環境・運命に反抗して空しく果てるとは彼女にとって思いもかけぬことである。Marty の人生観とも解釈できる humanistic な、また哀愁を帯びた美しさを物語る印象深い場面に、Giles と一緒に松の苗木を植える一節がある。

But she was a heroic girl, and though her outstretched hand was chill as a stone, and her cheeks blue, and her cold worse than even, she would not complain whilst he was disposed to continue work. (pp. 73-4)/‘How they sigh directly we put ’em upright, though while they are lying down they don’t sigh at all,’ said Marty....She erected one of the young pines into its hole, and held up her finger; the soft musical breathing instantly set in which was not to cease night or day till the grown tree should be filled—probably long after the two planters had been felled themselves. ‘It seems to me,’ the girl continued, ‘as if they sigh because they are very sorry to begin life in earnest—just as we be.’ (p. 73)

苗木はまっすぐに植えられる瞬間に、音楽的な木の息吹が始まる。それは成長後、樹々が倒されるまで昼夜止むことのないため息に感じられ、今、

木を植えているこの二人が倒れた後までも続くことであろう。彼ら二人と同じように、真剣に生きることを始めることを、大層悲しんでいるからため息をついているように彼女には思われる。‘Just as we be?’ He looked critically at her. ‘You ought not to feel like that, Marty’.——そのように思うものではないと Giles はたしなめるが、作者ハーディの思いもおそらく何れにもゆれうごく性質のものであったろう。Marty の清純さ、真実をありのままに観じ得る心、この世の人間に対する深い洞察力は、Giles の死後に次のような言葉で表現される。As no anticipation of gratified affection had been in existence while he was with them there was none to be disappointed now that he had gone. (p. 399) 彼が亡くなってしまったからといって、失望しなければならないことは何もないという達観した人生悟りの心境は、物語の最後、月夜に墓標にむかって彼女が思わず語りかけてしまう独白の中に表現されつくしている (pp. 443-4)。Marty South alone had approximated to Winterborne’s level of intelligent intercourse with Nature. (p. 399) と語られているように彼らは森林地の神秘的な世界を奥深くまで、日常の知識として身につけている。普通の文字と同様に、森の象形文字を読みとることもでき、彼らにとって、夜や冬、風や嵐の音や光景は、あらかじめ知っている原因や法則に従って起る、単純な出来事にすぎなかった。一緒に木を植え、倒してゆくうちに、歳月とともに少しではルーン文字のようにわかりにくい、一つにまとめればアルファベットのようにみえる、森の深遠な符号や象徴を、心の中にまとめているのであった。暗闇の中を枝をかきわけて進むとき、顔にふりかかる枝の slight lashing から、その木の種類がわかり、枝をわたってくる風の様子から、その木の名前を、はるか遠方からでも言いあてることができた。樹々の幹を一べつするだけで樹のしんが健かであるか腐りかけているか、また上の方の枝ぶりから、根の張っている地層の様子も判るのであった。春夏秋冬の自然の営みを彼らは、傍観者の立場ではなく、魔法使いの目で見ることができる。森に生活する者として自然を知るこのような観察力はめずらし

くないとしても、自分たちが植えた若木の遠い将来、自分たちの死後の樹木の生命に思いをはせる Marty の精神的な深まりは、ハーディの自然界を眺めやる時に心にわく、生命への凝視と共通するものであろう。小鳥のとまっている枝の位置から天気の変化を予知する Marty は自然の nymph さながらに映る。‘It will be fine tomorrow’ said Marty, observing them with the vermilion light of the sun in the pupils of her eyes, ‘for they are a-crouched down nearly at the end of the bough. If it were going to be stormy they’d squeeze close to the trunk. The weather is almost they have to think of, isn’t it, Mr. Winterborne? And so they must be lighter-hearted than we!’

ハーディにとって Marty は理想の人間像の一人であろう。数多い女性の登場人物のなかでその性格の凡庸さ故にかえって真実性が、読者に記憶される人物となっている。その点「キャスタブリッジ市長」の Elizabeth-Jane と同じ系列に入れることができる。自分に課せられた、不如意な人生を、あるがままに受容して、なおかつ ‘a good man’ ‘good things’ (p. 444) を見失わずに、運命に順応してゆく姿は、本作品の集中性を欠きがちな人物描写を補っている。この世の「悪」をどのくらい鮮明に説明し解きあかすことができるか、あるいは、それを試みようとしているかによってある思想の価値が問われるとするならば、Marty の描き方の背景は浅く不十分な点もあるが、それ以上に「運命」の冷淡な働きに対して、善なるものを見出すことを放棄しなかった彼女の人間観は、ハーディが終生心にいだきつづけていた、人間をみつめるあたたかい態度の一つのあらわれである。ハーディの pessimistic な世界観、又宇宙の盲目的意志の働きかけの結果が人間の行動心理にあらわれるとする考え方は誇張されてはならない。十九世紀末といわば不条理に徹した世界観が横行する現代との間に批判の尺度の差を考慮してみることは必要であるが、なおハーディには、人間信頼への肯定的示唆を見出すことができる。

Marty が悲哀にみちた報われない人生を与えられながら、反抗心から救

われていたのは、大自然に囲まれ感化されて、孤独な魂を存分に成長させることができたからと思われる。Every feeling and sentiment (p. 8) が自然と人間に等しくそそがれて、気高い威厳さえ感じさせる人格に描かれることになる。

Giles の最後は Marty が墓前で語りかける言葉によって、この小説に劇的な緊張感を与え物語をまとめることになる。ハーディは Max Gate の新しい住居に移って間もない、1885年の秋、ちょうど *The Woodlanders* 執筆中であったが次のように記している。

Tragedy. It may be put thus in brief: a tragedy exhibits a state of things in the life of an individual which unavoidably causes some natural aim or desire of his to end in a catastrophe when carried out.⁷⁾

悲劇、それは簡潔にこのように言うことができるであろう。ひとりひとりの人生がある目的とか願望を実現しようとするとき、必然的にそれを破滅にいたらせる事情が生じてくるがそのような在りようを示すものが悲劇であると。この考えはハーディがよく作中人物になぞらえあらわすところであり、Giles の一生も多分にそのような否定的人生観を具現化したものと思われる。心の落ち着きを保ち、どのような時にも自制を失わず、苦悩を口にすることなく、感情をあからさまに吐露することは決してない。Winterborne sped on his way to Sheraton Abbas without elation and without discomposure. Had he regarded his inner self speculatively, as lovers are now daily more wont to do, he might have felt pride in the discernment of a somewhat rare power in him—that of keeping not only judgement but emotion suspended in difficult cases. (p. 37)/He would not allow this incident to affect his outer conduct any more than the danger to his leaseholds had done, and went to bed as usual. (p. 112) 運命は彼に背を向けている (the fates were against him, p. 85) ことを静かに受けとめる姿勢は、自己犠牲ともいえる騎士道精神的な死によって昇華完成する。過去も未来も意に介せず、「現在」がもたらす結果だけをうけいれる、

stoic な obstinacy は、森林地帯を支配する自然の容赦ない掟のなかで暮らす森の人々の当然の姿勢であろう。愛情にも同様に一途であったために運命的な果て方をする、ハーディの典型的人物である。自然の厳然たる表情を観ながらそこで生きることに専念する人々——Giles が代表するような——は、人間に余り多くを期待する世俗的な生き方を知らないまま郷土にくちる時、‘honesty, goodness, manliness, tenderness, devotion’ (p.264) あるいは、‘homely faithfulness’ (p.411) という堅実な品性を、そこなわれない状態で、読者に伝えるのである。このような徳性は、キリスト教の伝統とするものであり、キリスト教の神を見出すことに失望した人生観にもかかわらず、ハーディ自らの人格に深く培われていたことを想像することができる。

しかし、人格の徳性・善意は実人生にあって、人間を幸福に導いたり、自らを救い守ることは稀であり、むしろ自滅へつながる未熟さと同一義である事を作者はなげき、やがて、Tess や Jude を創る過程に連なるのである。

以上、Marty と Giles はハーディの描いた人間のなかで理想像の原型ともいうことができることを述べてきたが、筋の進行上、主人公のような役割を見せるのが、Grace と Dr. Fitzpiers である。Grace は都会の洗練された文化を身につけ教養人となって Hintock に帰って来たとき、父親の社会的功名心の犠牲となってあやまった結婚をすることになるが、性格上の意志の弱さも彼女の人生を後悔あるものにする要素であった。

Her look expressed a tendency to wait for others' thoughts before uttering her own; possibly also to wait for others' deeds before her own doings. (p.42) 自分から決心し行動を起こす積極性と勇氣は乏しい。野心的考えを思いつく性格ではない。完全に都会化される程の適応力も足りなく、生れ育った郷土の生活への愛着は絶ち難い。次の一節は彼女の本心を語るものであり、またハーディ自身の批判的な言葉である。

I wish you had never, never thought of educating me. I wish I worked

in the woods like Marty South! I hate genteel life; and I want to be no better than she! (pp. 266-7)/.....cultivation has only brought me inconveniences and troubles. (p. 267)/I have never got any happiness outside Hintock that I know of, and I have suffered many a heartache at being sent away. (p. 267)

Grace の場合、Giles が彼女に寄せる思慕をかえりみずに、歯切れのわるい成行きで Dr. Fitzpiers と結婚したことについて、彼女の心の葛藤は、彼を死に至らせた後になっても、人間としての責任を自覚するまでに彼女を成長させることはできない。ただ soothing monotony (p. 404) の中で心をまぎらし、Dr. Fitzpiers と和解するが、村人たちが証言するように、不幸を一生担うことが予想される。Nothing ever had brought home to her with such forces as this death how little acquirement and culture weigh beside sterling personal character. (p. 404) 真に信頼に値する人格ととなりあわせたとき、文化的教養とか学問というものは如何に重みのない資質にうつることかを、彼の死によって認めるけれども、自省心をよびさますまでには到らない。しかし作者が当時の進歩めざましく、限りない希望にあふれている都会、それを支えている科学文明の発展に、批判と不安の気持をいっていたことを暗示している。洗練された精神、知的優雅さは、田園生活をつづける Wessex 人に、善悪を問わず影響を及ぼし始め、個人的社会的摩擦が、ハーディの歎きとなってゆくことは、他の作品中にも多く例を見出せる。

Dr. Fitzpiers はそのような都会気風をあらわす人物で、森林地の素朴な純粋な気質と秩序を持つ土着の人たちからみれば異質の来訪者である。自然界の恵みと威嚇に全てをゆだねて暮らす彼らの謙虚な人柄と対照的に、近代人の自信、世俗的願望を存分に発揮して、Little Hintock の人々に身勝手に振舞う彼は、現実の世界より観念の世界を、諸々の原理に関してはその応用よりも発見を好み (p. 135) 孤独な真夜中の森を嫌う。道徳感情が稀薄で良心に従うことを知らない。彼の image の反対を想像すると、

イギリス人氣質の典型がうかびあがってくるのに気付く。

単調なこの長篇小説の plot を展開するべく創られた人物であるとみれば、たくましさを秘めた Wessex 人と並べてみたとき、非現実性が先に立つ夢想家と解釈されても当然かもしれない。

(4)

この作品を鑑賞あるいは評価するときに大きな欠点は、構成上焦点が不鮮明なことであろう。「キャスタブリッジ市長」では主人公に反対に極めて稀有な運命をたどらせて有機的に仕上げ技巧的に過ぎるという非難さえ受けており、*The Woodlanders* と比較するとそれぞれの作品の特徴がはっきりする。*The Woodlanders* の意図はある個人に焦点をあわせて小説を構成することではない。大自然に棲息する生命すべてと、人々のもの静かな営みの間の unity を表現して、Hintock のような孤立した森林地においても、他所と同じように人間の不幸な生と死がくり返されてゆく諸相を展ずることであったと考えられる。

注

- 1) Southerington, F. R.: *Hardy's Vision of Man* (London: Chatto & Windus, 1971) p. 118
- 2) Carpenter, R.: *Thomas Hardy* (New York: Twayne Publishers, 1964) p. 124
- 3) Miller, J. H., *Thomas Hardy: Distance and Desire* (The Belknap Press of Harvard Univ., 1970) p. 92
- 4) Text: T. Hardy, *The Woodlanders* (The Greenwood Edition) (Macmillan, 1972)
- 5) 山本文之助『トマス・ハーディ文学論考』〔上〕(千城書房, 昭37) p. 89
- 6) Carpenter, p. 119
- 7) Hardy, F. E.: *The Life of Thomas Hardy* (Macmillan, 1962) I, p. 231